

曾爾自然調査隊 (読み物編) 植物の不思議

1 はじめに

曾爾高原では、季節の移り変わりとともに、たくさんの植物が芽を出し、育ち、花を咲かせています。それらの植物の中には、不思議なものもたくさんあります。考えようによっては芸術的ともいえるものもあります。

しかし、植物を見て不思議と感じるかどうかは個人によってちがいます。育った場所・年齢・今までの経験・生まれつきの性質など、人はそれぞれ異なるものだからです。

この読み物では、曾爾にみられる植物の中から、筆者が不思議だと感じているものをいくつか選び、みなさんに紹介します。みなさんが植物を見る視点と作者の視点とは、どこが同じでどこが異なるのでしょうか。人それぞれの感じ方を楽しんでみましょう。

2 植物の紹介

ツククサ：

あざやかなコバルトブルーの花は、ミッキーマウスの顔を思い浮かべます。なかには、トンボの顔を連想する人もいます。

ボウシバナという別名もあるこの花は、昔は^そ染^もめ物に使われました。(今も使われているのかも知れませんが…)そのため「^つ着^くき草」とも呼ばれます。「色がつく」という意味でしょう。でも、やはりこの花には「ツククサ」という名前がいちばんふさわしいです。田畑のあぜ道やみその側などで、朝露にぬれた姿を思い出しませんか。花は半日でしぼんでしまいます。露がなくなるころにはあまり咲いていません。だからこの花は「^{つゆ}露草」なのです。

ところで、あざやかな色の花びらをもつ反面、この花には昆虫を集めるための蜜^{みつ}が出ません。それに、6体のおしべの中で、花粉をつくることができるのは2本だけです。しかたがないので、自分がしぼむことでめしべに花粉をつけています。せつかくの色や形があまり生かされていないのです。人間にも不器用な人はいますが、この花もそのような花なのではないでしょうか。



オカトラノオ：

日本全土の野原や山地に生える植物です。「^{とら}虎の^お尾」に似ていることからついた名前らしいです。たしかに「しっぽ」のように見えますが、どうして「^{とら}虎」なのでしょう。もしかしたら、やぶの中から、のぞくように花を咲かせているからでしょうか。見ようによっては「オオアライクイ」のようにも見えます。

しかし、その名前に反して、腰を曲げてお辞儀をするように咲いているこの花は、草原で出会った人々にやさしい^{ふんい}雰囲気^きを与えてくれます。なぜこんな形になるのでしょうか。お亀池などの湿地^{しつち}に生えるヌマトラノオはオカトラノオのなかまですが、このように曲がってはいません。

オミエシ：

この花は、秋が近づいてくると草原のあちらこちらに黄色い小さな花を咲かせます。どちらかという^{きゃしゃ}華奢^{くわしや}で弱々しく咲いているこの花は、曾爾高原では周りの草丈より^{くんせい}先^{せん}高い位置に花を咲かせ、他のオミエシと群生することなく単独で咲いていることが多いようです。なぜでしょう。秋の花ということもあって、少し^{さび}寂しい^{せひ}印象を与えます。



オミナエシは、漢字で「^{おみなえし}女郎花」と書きます。よく似たなかまで、オトコエシ「^{おとこえし}男郎花」という植物もあります。植物の名前は、ちょっとした印象をうまく用いてつけられているものです。



キンミズヒキ：

オカトラノオの花（サクラソウのなかま）を黄色くしたような形ですが、同じなかまでではありません。「ミズヒキ」や「ギンミズヒキ」という花もありますが、これらはタデのなかまで、やはりキンミズヒキとは異なります。

これらのミズヒキという名前は、お祝いの袋などに結んである紅白の細長いひも「^{みずひき}水引」からついたものです。キンミズヒキは黄色い色ですが、成長するとミズヒキのように細長くたくさんの花を咲かせます。そのため、この名前がついたようです。

じつをいうと、キンミズヒキはバラのなかまなのです。花が咲いている様子はどう見てもバラには見えませんね。どうしてこのような形になったのでしょうか。ちなみに、みなさんのよく知っているヘビイチゴも同じバラのなかまです。

ナンバンギセル：

普通に曾爾高原を歩いているとき、あまり見つけることのできない植物です。それは、ナンバンギセルがススキの根などに寄生して生きている植物だからです。茎は地中にあり、葉は退化してほとんど見ることができません。

「ナンバン」とは、昔のポルトガルやスペインを指す言葉です。ナンバンギセルという名前は、それらの国の「ギセル」、つまりたばこを吸うためのパイプ、という意味です。形を見れば納得できると思います。落ち着いた風情で、ススキの根元にひっそりと咲いている姿は、その色の上品さも手伝って感動を覚えます。

でも、「ススキに寄生する」と聞くと少し印象が悪くなってしまいます。「寄生」という言葉は「他の生物に対する侵略行為」をイメージしてしまからです。そのように思うと、ひょろひょろとのびたその姿が不気味に思えてしまいます。

人の心は、ちょっとした言葉や印象で変わってしまいます。ナンバンギセルは、ただ単に自然の中で生きているだけなのですが、どうによってはおしゃれで美しい花になるし、反面不気味な侵略者にもなります。みなさんはどのように感じますか。実物を見ないと何ともいえないでしょうね。



カキラン：

柿の色をしているランなのでカキランといいますが、月ごろお亀池の中に美しく咲いているのを見かけます。緑の多いこの時期に、小さいながらあざやかな柿色を池の中に点在させているのが印象的です。

別名スズランともいいますが、世間一般に知られているスズランとは違います。よく知られているスズランはユリ科の植物で、花の形が鈴に似ています。カキランはラン科の植物で、つぼみの形が鈴に似ています。つぼみより先咲いている花のほうが印象的なので、やはりこの花はカキランなのでしょう。

日常生活ではほとんど見ることのできないカキランですが、月のお亀池に行けば、みごとにその姿を見せつけています。曾爾高原には、このような花がたくさん咲いています。どうしてでしょうね。みなさんも植物の不思議を探してみましょ



3.おわりに

ここで紹介した植物について、みなさんはどのくらい「不思議」を感じられたでしょうか。「なあんだ、全然不思議じゃないよ。」と思った人もいるでしょう。「なるほど、考えてみれば不思議なものだ。」と感じた人もいるでしょう。感じ方は千差万別、個人によって異なるものです。でも、今少し発想の転換をしてみてください。いつもの自分とは違う視点で物事を観察する心の余裕をつくってください。きっと不思議な世界が広がっていくはずです。それが、自然への新しい扉を開ききっかけとなります。また、科学への第一歩にもなります。人間には「大きく・幅広く世界を観察する力」と「細かく・正確に物事を観察する力」が必要です。みなさんも、ぜひこの力を身につけてください。そして、自分なりのものの見方をしてください。それができるようになったとき、きっと自分を取り巻く世界が変わるでしょう。

発行年月 平成 14年 3月

執筆者 嘉戸 英次

参考文献

・長田武正 (1985) 検索入門、野草図鑑、保育社

・東 謙吉 (1996) 曽爾高原の植物、国立曽爾少年自然の家